

折口信夫と海の世界

田中 希生

世の転変を、思ひがけなく見た。国学の系譜の末に列つらなる私には、特にその思ひが深い。前月十五日の後、暫らく山に入つて、ものを考へて見たけれど、思ふとほりの決断もつかなかつた。さうしてまた、山となぢみ浅き生活に戻つた。

折口信夫『山の端』1945年

神こゝに 敗れたまひぬ。しづかなる青垣
山も よるところなき
國びとの思ひし神は、大空を行く飛行機と
おほく違はず
信薄き人に向ひて 恥ぢずあむ。敗れても
神はなほ まつるべき

折口信夫『近代悲傷集』1952年

◎ 折口信夫と近代

1887年、大阪府西成郡木津村に生まれる。曾祖父は飛鳥坐神社の神主飛鳥ノ直助信、祖父造酒ノ介は折口家に養子。國學院大学にて「最後の国学者」三矢重松の薫陶を受け、柳田國男の影響のもと、民俗学を修め、折口学と呼ばれる独自の学問を大成する。詩人としては釈迦空と名乗った。

- 本居宣長以来の近世国学の系譜から生まれた折口学。
- なぜ明治維新という日本の近代革命は神を必要としたのか？
(ニーチェのいう、近代西欧における「神の死」と、近代日本の神。)
- またどのような神を必要としたのか？

◎ 死と国家

国家権力は生者の世界にだけ広がっているわけではない。《死》という虚構の世界にもその足場をもたねばならず、また死者の世界に端を発してこそ、国家。奈良や京都は死者の都でもある。

- 祖先崇拜・極楽往生・慰霊・供養・戦争（軍備）・医療

◎ 近世社会の到来～国家祭祀の不在～

★ 国家祭祀の不在

近世において、徳川権力が期待した医療は死の世界をわずかに覆い隠すにすぎなかった。現世的な血によってのみ権力の正統性を担保することは困難。国家権力による死＝精神の世界の黙殺と死から生へ、生から死へ、といった生成変化の抑圧は、かえって夜の世界の充溢、鎮まらぬ魂＝幽霊の跋扈を許した（Ex.「怪談」の流行。家ごとの墓参。年忌法要と檀家に課すなど、近世寺院は大量死（災害や戦争によって生じた無縁仏・無縁霊）に対応できない）。

◎ 近世国学の意義

★ 本居宣長の見いだした神

人の行ふべきかぎりを行ふが人の道にして、そのうへに、其事の成と成ざるは、人の力に及ばざるところぞ。

本居宣長『玉くしげ』1787年

- 近世道徳＝恋愛の抑圧・家系の持続、すなわち子を《なす》ところまで人為に頼ろうとする近世社会に対する痛烈な批判。人の死生を司る生成神の領分の自覚。
- 『源氏物語』＝「道ならぬ恋」に新たな道徳を読みとろうとする宣長の天才。人為的・作為的な儒者の《道》に対する《惟神道》。
- 産巢日の神（タカミムスヒ・カミムスヒ二柱の生成神）を最重要視する新しい視座。

- ・神は実在か？（神仏は存在するor神仏は存在しない）……一向門徒or織田信長
- ・虚構か？（神仏は不在。だが、統治には必要な形式）……徳川政権

【宣長の神の定義】

迦微と申す名義は未思得ず。さて凡て迦微とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀る社に坐御霊をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり。

本居宣長『古事記伝』

- ・ 神を定義していない。むしろ「定義」を離れていくもの。

仰天地は一枚にして隔なければ、高天原は、万国一同に戴くところの高天原にして、天照大御神は、その天をしろしめす御神にてましますば、宇宙のあひだにならぶものなく、とこしなへに天地の隈をあまねく照らしましまして、四界万国此御徳光を蒙むらずといふことなく……

本居宣長『玉くしげ別巻』1789年

- ・ わけても、日本の神は、太陽。日本人はアマテラスの子孫。（←市川匡の批判『未賀能比礼』）

そも此ノ道は、いかなる道ぞと尋ぬるに、天地のおのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず、此ノ道はしも、可畏きや高御産巢日神の御霊によりて、（世ノ中にあらゆる事も物も、皆悉に此ノ大神にみたまより成れり、）神祖伊邪那岐大神伊邪那美大神の始めたひて、天照大御神の受たまひたもちたまひ、伝へ賜ふ道なり、故是以神の道とは申すぞかし、

本居宣長『直毘靈』

世間に有とあることは、此天地を始めて、万の物も事業も悉に皆、此二柱の産巢日の大御神の産霊に資りて成出るものなり。

宣長『古事記伝』

- ・ 生成変化の肯定。神とは、生成それ自体。实在論でも虚構論でもない。生成論。（儒教は鬼＝生成変化を嫌う。）
- ・ 伊邪那岐の涙ないし目脂から生まれた天照大御神や月讀命にせよ、鼻水から生まれた建速須佐之男命にせよ、それらは神々のなす新陳代謝のはたらきであり、垢（禍津日神）や尿（弥都波能売神、水の神）や屎（波瀨夜須神、土の神）でさえ、神格化される。神でさえ、変化のただなかに身を置く。

★ 死者のゆくえ＝海（平田篤胤）

然らば、亡霊の、黄泉国へ帰るてふ古説は、かにかく立ちがたくなむ。さもあらば、此国土の人の死て、その魂の行方は、何処ぞと云ふに、常磐にこの国土に居ること、古伝の趣と、今の現の事実を考わたして、明に知らる……

平田篤胤『霊能真柱』

- ・ 平田篤胤は、師の宣長が悪神とみた禍津日神を、禊の女神、瀬織津姫と同一視。
 - ・ なぜか？ 神もまた汚れる（生成変化する）から。大祓詞によれば、瀬織津比賣によって流され海にたどりついた汚穢は、根の国底の国（夜見国）にあつて最後に待ち構える速佐須良比賣のもとで消え去ってしまう。
高山乃末短山乃末與里 佐久那太理爾 落多岐都 速川乃瀬爾坐須 瀬織津比賣登云布神 大海原爾 持出傳奈牟 ……根國底國爾坐須 速佐須良比賣登云布神 持佐須良比失比氏牟 此久佐須良比失比氏婆
罪登云布罪波 在良自登
- 『大祓詞』（中臣祓詞・中臣祭文とも）
- ・ 黄泉に落ちるのは罪だけであり、死者はこの世にとどまる。神と人間の分離。そのかわりに「顕明界」・「幽冥界」の区別を提起（人間と、人間に似た者たち（死者・妖怪etc..）からなる二つの世界）。
 - ・ 死者の魂を鎮める祭祀の重要性。（祭政一致の明治維新・王政復古へ！）

◎ 民俗学の誕生

★ 柳田國男

平田派の神官、松岡操の六男として1875年に出生。農商務省の官僚として、「何故に農民は貧なりや」の問いを抱いて、貧困にあえぐ地方農村をみて、民俗学を開拓。『遠野物語』（1910年）における「願わくは之を語りて平地人を戦慄

せしめよ」はつとに有名。平田篤胤を敬愛しつつ、日本の固有信仰を氏神信仰や祖霊信仰に見だし、その意味を終生問い続けた。

荒木田・度会二氏の祭っている神が、遠い先祖の霊だったことが判り、それが一定の期日を約して、山から降って来られるということもほぼ確かになった。そうしてその神々がかつては後裔の生存の基礎であるものを安全ならしめんがために、稲の生育に主たる注意を傾けて、毎年、必ず田の営みの始めと終りとに、故郷の土を見舞われるものと、信じ切っていた時代があるということも、行く行く明らかになって来る見込みがあるのである。

柳田國男『山宮考』

私がこの本の中で力を入れて説きたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち例は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、おそらくは世の始めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。…死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから、永く子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉とを顧念しているものと考えだしたことは、…限りもなくなつかしいことである。

柳田國男『先祖の話』

【中央～周縁図式】

『蝸牛考』……デンデンムシ（畿内）・マイマイ（中部・中国）・カタツムリ（関東・四国）・ツブリ（東北・九州）・ナメクジ（東北・九州の一部）の方言分布を考察し、畿内を中心に新しく、周縁に行くにしたがって古い言葉が残っているとみた。（方言圏論）

- 中央・平地の豊かな者（権力者）・周縁・山間部の貧しい者、という図式。古代の神の世界は周縁部に残る。

◎ 折口信夫の民俗学

★ まれびと（稀人・客人）

客をまれびとと訓ずることは、我が國に文献の始まった最初からの事である。従來の語原説では「稀に来る人」の意義から、珍客の意を含んで、まれびとと言うたものとし、其音韻變化が、まらひと・まらうどとなつたもの考へて來てゐる。…まれびとは古くは、神を斥す語であつて、とこよから時を定めて來り訪ふことがあると思はれて居たことを説かうとするのである。…私の考へるまれびとの原の姿を言へば、神であつた。第一義に於ては古代の村々に、海のあなたから時あつて來り臨んで、其村人どもの生活を幸福にして還る靈物を意味して居た。

折口信夫「国文学の發生（第3稿）」

- 沖縄でのフィールドワークから、流れ者を重視する新しい民俗学を提起。流れ者＝神であり、かならずしも周縁部のみ、古代の神々がいるわけではない。むしろ、流れ者と定住民との交渉があつたとみる。
- 大東亜共栄圏への道程をもみるべき。

【さまざまな武士論】

① 原勝郎＝柳田國男武士論（ナショナリズム）

江戸期の学者が、古は兵農一致と論じたのは有名なことであるが、人によってはこれを平時に武士が下人を指揮して、農業を営んでいたというだけに解して、武家も農家も古くは同一の団体の一分子であつたというまでには思つておらぬものがあるかも知れぬ。しかしこれはそのような、中途半端なものではなくして、徹底的に武家すなわち農家であつたことは疑いなき事実で、これがまた日本の社会のすこぶる誇るべき特色で、あるいは世の中が末になつたごとく憤る人もある時勢に際して、吾々が将来の發展に対して、なおすくなからざる希望を持つ根拠である。

柳田國男「家の話」

- 周縁に住む農民から生まれた健全な鎌倉武士（坂東武者）のイメージ。（在地領主制論）

② 久米邦武＝高橋昌明武士論（中央集権論）

武の本体は公家社会にあり、そこで発達した弓馬の道を吸収することによって武門武士の武芸が生まれた……。

高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』

- 武士は職能集団。中央に住む貴族（伊勢平氏や河内源氏）から武士は生まれた。（権門体制論）

③ 折口信夫武士論

山ぶし・野ぶしと言ふ、平安朝中期から見える語には、後世の武士の語原が窺はれるのである。『武士(ブシ)』は実は宛て字で、山・野と云ふ修飾語を省いた迄である。

折口信夫「国文学の發生（第四稿）」

此頃〔平安末期〕になって目立って来た、もう一つの浮浪者があつた。諸方の豪族の家々の子弟のうち、総領の土地を貰ふことの出来なかつたもの、乃至は、戦争に負けて土地を奪はれたものなどが、諸国に新しい土地を求めようとして、彷徨した。此が又、前の浮浪団体に混同した。道中の便宜を得る為に、彼等の群に投じたといふやうなことがあつたのだ。後世の「武士」は、実は宛て字である。「ぶし」の語原はこれらの野ぶし・山ぶしにあるらしい。又、前の浮浪者とても、元来が、喰はんが為の毛坊主商売なのであつて見れば、利を見て、商売替へをするには、何の躊躇もなかつた。

折口信夫「ごろつきの話」

- 🙄 武士は「ゴロツキ」から生まれた、「巡遊団体」の一種。うかれ人・ほかひ人。
- 🙄 たんなる罪障論ではない。流人にして神聖な（＝いかがわしい）存在。経済論が背景にある。
- 🙄 彼らが、ひとの忌み嫌う仕事＝殺生＝戦争に対応（否応無しに仏教道徳を超える存在とならざるをえない）。

★ みこともち

沖縄の宗教は、僧袋中の命けて、「琉球神道」と申し候とほり、我が国の固有信仰と全く同一系統に属するものに有之、神道の一分派或は寧ろ、其原始形式をある点まで、今日に存したるものと申す事を得べきものに御座候。

「沖縄に存する我が古代信仰の残孽」1924

- ・ 巫女中心の思想（「のろ」）と日本の祝詞（のりと）の共通点。
- ・ 「のり」とはなにか？ 神の言葉（呪言＝現実に作用する言葉の力）を乞うこと。神の言葉は即実現するため、呪＝祝となる。
よごとには二つの形態がある。ひとつはただちに結果を生じるもの。もうひとつは、唱えるうちに結果の予約なる「ほ」の現われるもの。

【ほかひ】

ほぐ……寿詞を唱えること。再活用してほかふ、熟語となつてこと（言）ほぐ。

「ほ」…神慮の暗示の、捉えられぬ影として象徴的に現われること。

「ほむ」・「ほぐ」という語は予祝する意味。未来に対する賞賛。その語にかぶれて精霊たちが良い結果をもたらす＝「言葉さきはふ」（言語精霊が能動的に靈力を発揮すること）。

みこともちをする人が、其言葉を唱へると、最初に其みことを発した神と同格になる、と云ふ事を前に云つたが、更に又、其詞を唱へると、時間に於て、最初其が唱へられた時とおなじ「時」となり、空間に於て、最初其が唱へられた処とおなじ「場処」となるのである。つまり、祝詞の神が祝詞を宣べたのは、特に或時・或場処の為に、宣べたものとみられてゐるが、其と別の時・別の場処にてすらも、一たび其祝詞を唱へれば、其処が又直ちに、祝詞の発せられた時及び場処と、おなじ時・処となるとするのである。…大和といふ国名が、日本全体を意味する所まで、拡がった事なども、此意味から、解釈がつきはすまいか。「大倭根子天皇」といふのは、万代不易の御名で、元朝の勅にも、即位式の詔にも、皆此言葉が使はれてゐたが、此は云ふ迄もなく、やまとの国の、最高の神人の意味である。山城根子・浪速根子・大田々根子等の根子と一つである。そして、其範囲の及ぶ所は、最初に大和一国内であつたのが、後には段々拡がったので、大和朝廷の支配下であるから、日本全国が「やまと」と呼ばれたのではなく、大日本根子天皇としての祝詞の信仰の上から、来てゐるのである。

折口信夫「神道に現れた民族論理」

◎ 死者の魂

沖縄の神道では、「三十三年にして神を生ず」と言つて、死人は此だけの年月がたつと、神化するものと見てゐた。年月に異動はあつても、日本近代の民俗では、やはり亡者を何時までも宙有に迷つてゐなければならぬものとしてゐた訣ではない。僧家の手に管理を委ねた亡霊の中、実は年期既に到つたものすら、永久と言ふ長い時に涉つて、成仏の時の到り難いものがあつた。其をつい失念して、一度死んだ人間は、永へに仏の榮光に預り、仏性を得ることが出来にものゝやうに考へてしまつたものである。此は実は供養に廻向に礼を尽す情熱が、そんな風に、いつまで経つても、善き児孫の心に甘え、其を脱して独立の光明世界に生じようとせぬ亡霊ばかりと言ふ風に思ひ違ひをさせたのであらう。此は我々民族の持つ迂遠なる循環性と、僧侶たちの仏教が、いつまでも儀礼を脱却することに努めなかつた為でもある。

折口信夫「民族史観における他界観念」1952年

- ・ 戦後、遠い海の果てに散つた若者たちをいかに弔うかを重要な主題に。近代化された靖国神社はもちろんのこと、死者は祖国を離れないとみた柳田の視座では不十分。
- ・ 若者＝未熟な魂（「未成霊」。「完成霊」ではない）。本来、未熟な魂はこの世に念を残して成仏できない。明治神道・靖国神社においては、死ねば即神に。

未成霊の所在は、何処と考へたものか。此も明らかではないが、推察の論理だけは辿られさうである。…若者一未成年である間に死んだものは一先に述べた浄罪所一煉獄のやうな所にあることになつて居るらしいが、近代では未婚者を以て、若者・未成年者などのすべてを表示するが故に、未婚の児女は…養ノ河原サイノカハラに集り、石の塔を積むと言ふ。

- 室町時代に生まれた賽の河原信仰。幼子が石積みをし、鬼に虐められているという。夭折した幼子や早世した青少年は家や集落の共同の墓地には埋葬されずに、集落の境界、村境に葬られた。寿命を全うしなかったのであり、いち早い再生・生まれ変わりを願っただろうが、逆縁であるために、成仏できない不浄の霊であり、邪霊となって災いをもたらすことを恐れられた。

★ 折口春洋の死

我どちにかゝはりもなきたゝかひを 悔いなげゝども、子はそこに死ぬ
たゝかひに果てにし子ゆゑ、身に沁みて ことしの桜 あはれ 散りゆく
たゝかひに死にしわが子の 果てのさま 委曲に思へ。奇き最期を
戦ひにはてし我が子のかなしみに、国亡ぶるを おほよそ見つ
愚痴蒙昧の民として 我を哭かしめよ。あまり惨く 死にしわが子ぞ
いきどほろしく 我がある時に、おどろしく雨は来たれり。わが子の声か

『倭おぐな』

- 大東亜共栄圏の夢ははかなく潰えた。
- 硫黄島で死んだ養嗣子、春洋（旧姓藤井）を悼んで詠まれた歌。

【念仏踊り】

念仏踊りは、大体二通りあつて、中には盆踊り化する途に立つてゐるものがある。だが其何れが古いか新しいかではなく、念仏踊りの中に、色々な姿で、祖霊・未成霊・無縁霊の信仰が現れてゐることを知る。墓山から練り出して来るのは、祖先聖霊が、子孫の村に出現する形で、他界神の来訪の印象を、やはりはつきりと留めてゐる。……一方、古戦場における念仏踊りは、念仏踊りそのものゝ意義から言へば、無縁亡霊を象徴する所の集団舞踊だが、未成霊の為に行はれる修練行だと言へぬこともない。なぜなら、盆行事（又は獅子踊）の中心となるものに二つあつて、才芸（音頭）又は新発意と言ふ名で表してゐる。新発意は先達の指導を受ける後達の代表者で、未完成の青年の鍛錬せられる過程を示す。……このやうに、魂の完成は、死者の上のみ望まれたことではなく、生者にも、十分行はれてゐなければならぬことであつた。生前における修練が、死後に成果を発するものと考へられて来る。

「民族史観における他界観念」

- 未熟なうちに非業の死を遂げた若者たちへの、折口の切なる願い。

★ 死者の行方

日本人の場合、海を背景とする地域に長く住み、其後も又、ある部分では、海の生活を続けたのだから「海」に他界がないとすることは、我々の採らうと思はぬ方法である。其と同時に、海を離れて山野に住んだ時期の伝承ばかりを持つと思はれる日本人だから、高天原他界説が正しいと言ふのも、単に直感にのみ拠つてゐないだけに信じたい気が深く動くが、此とて日本国家以前・日本来住以前の我等の祖先の生活を思ふと、簡単に肯ふことは出来ない。（「民族史観における他界観念」）

Cf. 柳田國男「先祖の話」

私がこの本の中で力を入れて説きたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、おそらくは世の始めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。…死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから、永く子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉とを顧念しているものと考えだしたことは、…限りもなくなつかしいことである。